
狩野芳崖筆「仁王捉鬼図」の主題
—黎明期の美術展覧会における画題の模索—

狩野芳崖筆「仁王捉鬼図」（東京国立近代美術館）は、フェノロサの強い影響下で制作されたことで知られる芳崖晩年の代表作であり、明治十九年の鑑画会第二回大会に出品された。本図を論じる従来の研究は、表現技法の研究及び主題を捉える枠組みの研究において、充実した成果を築き上げてきた。その一方で、主題の具体的な内容に踏み込んだ議論は十分になされていない。本図の主題である「仁王捉鬼」とは、何を描いていて、何故展覧会の場でこのような仁王図としては前例のない主題が選択されたのだろうか。本発表では狩野派粉本に伝わる画題の知識が主題の源泉であった可能性と、鑑画会大会が黎明期の美術展覧会であることに着目し、本図の主題の内容とそれが構想された場について考察を行う。このような作業を通じ、本図が「展覧会芸術」の主題を模索した先駆的な作例として近代日本美術史上に位置づけられるとする仮説を検証したい。

前半では、従来の研究において見過ごされてきた高屋肖哲『雑事抄録』の記述の再検討を起点に、「仁王捉鬼図」が「玉を守護する仁王」を描き、「玉の守護者」として仁王を構想する基礎に「舍利鬪争説話」が存在したことについて論じる。「釈迦が荼毘に付される際に捷疾鬼により盗まれた牙舍利を仏尊が取り返すという内容を基本形とする一連の説話」を描く図像は、狩野探幽「学古帖」（個人）を端緒とし、常信縮図（東京藝術大学）や尾形家絵画資料（福岡県立美術館）などに構図を変えながら継承されていたことが今回確認された。明治十年代の作例としては橋本雅邦筆「毘沙門天」（フィラデルフィア美術館）を「舍利鬪争説話」が描かれた粉本に基づくものと指摘でき、雅邦と同門の芳崖もまた同様の知識を持っていたと推察される。この事実を前提に「仁王捉鬼図」に描かれた玉を舍利と解釈できる可能性について、類似する造形との比較から考察を行う。

後半では、「仁王捉鬼図」の画題と尊像が、鑑画会第二回大会という黎明期の近代的美術展覧会の場で敢えて選択された可能性を指摘し、鑑画会第二回大会における「玉を守護する仁王」の意味と「仁王捉鬼図」の史的 position を考察する。鑑画会第二回大会は公衆に対する発信と教導の意識を強く持った展覧会であった。本大会を前にしてフェノロサが鑑画会の画家たちに対して行なった演説では、画題は画家と公衆が相互に影響を与え合う結節点に位置づけられる要素として重要視されている。従って「仁王捉鬼」の主題もまた、一般公開の展覧会のために敢えて選択されたものである可能性が高い。このことと仁王という尊像の性格を考慮した時、本図の主題は「護法」を公衆にとって親しみ深い姿で人格化した主題であったと解釈できる。